

# 二身やの老

世眼の巻

## 報身と應身

今云ふ此二身の區別は吾人が宗教の客體なる如來に對する觀念に暫らく二身を立つ吾人が最高最大最深遠の理想としての如來は、絕對人格、宇宙の最高中心に在して、無量の相好光明萬德豐備して缺ることなく一切諸佛の最尊第一者にして、萬法の統一者、諸佛の本地本佛にして、一切衆生を攝取し給ふ絕對界の大日輪なり。そは吾人の理想の客體にして、其廣大なることは凡夫心力の及ばざる處なり、理想的觀念的に想ふのみ。絕對理想の如來より吾人の心に相應して最高等に最圓滿に意識的に思想観（一）して心眼の前に現じ給ふは、是吾人の信念に感ずる應身なり。开は各々の神格的觀念の必ずしも同一ならざれば、其能觀の心の異なるに隨つて所觀の佛身も亦同じからず。例へば人類の面容は同一形式にして而も各々同じからざるが如きなり。たとへ其能觀に隨つて所觀の影は異ると雖も人の宗教心を眞實ならしめ精神生活を靈ならしむる點

に於ては同一なり。其最高の理想の客體を報身と云ひ、各々の眼前に彷彿して現するものを應身なりとす。

## 彌陀と釋尊

諸佛最尊第一の彌陀は即ち宇宙唯一の最高中心の尊體にして絕對的最大限度の主尊なり。宇宙には究の靈的人格實在するが故に暫く宇宙の一分たる此地球上に釋尊となり人格として實現せるなり。釋尊は地球上の賢聖に勝れて唯一絕對の人格なり。最圓滿なる聖者なり。斯圓滿なる釋尊は即ち宇宙中心の獨尊の人身現なり。此人身現の釋尊、宇宙絕對大の中心靈體に歸する時は即ち彌陀佛なり。若し宇宙に絕對的の靈體の本地なかりせば此地球上に人身人格の顯現すべき元因なきなり。また釋尊の暫らく地上に顯はれたる圓滿なる人格を以て現するにあらざれば彌陀の實在は衆生知るに由なし。故に彌陀と釋尊の關係は天の月と水に映する月の如し。水中の月は天に在る月なり。若し天に月なくして何ぞ水中の月在らん。釋尊てふ靈的人格は宇宙に存在靈界に存在する靈的滿月が此人界に映現したるに外ならず。

## 釋迦已前印度教の一神と彌陀

釋尊已前に印度に於て大自在天なる宇宙唯一の信仰は在りしならん。天に絕對なる神が存在するならば其現（一）して此地上に神を代表する大人格の出現すべき等なるに印度教には宇宙唯一の圓滿なる人格的の神を證する程の地上に人格現なきは、其宗教が天の神に接觸すべきの道なき故に、人の宗教的衝動として天の一方に人格的神を憧憬するも、神はいかなる人格的なるか、いまだ眞容を表はすに人格の顯現なし。此に在來の印度に於て未だ在らざりし釋尊なる世界的の大人格が出現せられたり。此靈的人格こそ宇宙唯一の神尊の靈徳を表現すべき人格たり。然るに小乗教の人は、人格即ち神なり佛陀即神なり斯の人格の前には天の神も奉仕し尊敬するてふ信仰は在れど

も、釋尊なる人格が此地上に出現するには宇宙に唯一の絶対的だ大人格實在して其れが地上の人格現なるの眞理を知らず。故に在來の印度教にては天の神在るを信するも地上に世界的大人格の神あるなし。斯宇宙大なる絶対的人格が地上に出現して一切の人類を絶対人格なる神尊に歸命信順すべきの眞理を教へ給へり。斯眞理を明らかに證明するは即ち大乘教のみなり。

大乘教にては宇宙の最高中心に存在する處の無量光如來が此地上の人類には大法身より受たる靈性具有す。其靈性を（ ）また無量光如來に歸命信順すべき眞理を教へん爲に人佛釋尊として出現せる釋尊は、最高中心彌陀の分身にして人格現なり。例へば月は天に在て影が萬水に映する如し。彌陀は天佛の月に例し釋尊は人佛にして水中の月の如し。故に彌陀は絶対の靈格にして人類の測知する所にあらず。然れども釋尊なる人佛として出現せる故に吾人は人佛釋尊を通じて、天佛の彌陀を信解すべきにあり、斯眞理を明にするもの獨り大乘佛敎のみなり。

二

釋尊に前の天の一神の表相と釋尊已後釋尊を通じて信奉する所の神とは其表相を異にす。釋尊前の天神を表明するに波羅門の如き多くは標幟を以て神を表す。其は地上の大人格を通じて直覺的に神を表する相なきが故に、標示を以て神を表はす。故にバラ門が神を標するに成立を表はすに（ ）破壊を表はすに顯骨杯を以てす。然るに大乘佛敎は世界唯一の大人格釋迦を以て是全く天なる神の顯現と信するが故に、天神彌陀は即ち釋尊を宇宙大にし絶対界の大人格とし、應身に三十二相八十種好あれば報身には八萬の相と八萬の好ありて人格的の靈的現なりとす。

世眼導師行に住し

佛陀は世界一切人類の眼として人生の歸趣する處を教へ人類を無明の眠生死の夢より醒して無上正覺即ち無量光明界を開きて永遠の生命なる涅槃に歸趣する道を教へたまふ。若し人佛陀の指導に依らずば闇より闇に迷ひ永劫生死に流轉して出期あることなし。此一段は世の眼たる佛陀が人生の光明を示したまふにあり。

知力的の信仰 轉迷開悟

此の事は心理からは知力的の信仰。宗教の智力は世間の自然科學等の理性を以て認識すべき知力にあらず。即ち生死の源を覺り宇宙の大道を悟りて眞理の光を以て人生を永遠の光明に指導する知力なり。迷を轉じて悟を開くとは、迷とは衆生自ら何より自己が生れ來り死の趣向する處を知らず、冥より冥に入る凡夫の無明の夢を醒して眞理の本覺に歸趣せしむる眞理を教ふるにあり。

世眼導師の解

釋尊を世眼と號くることは人の身體に若し眼目無かりせば全體闇黒なり。然るに眼目ありて能く見て目的の地に行くことを得る如く、亦全體は如何に廣大なるも若し太陽無かりせば之に屬する星界は悉く闇黒にてまた何の爲作する處なかるべし。佛陀は精神界の大日光なりまた身體中の眼目なる如し。若し佛陀出世なかりせば此世界中の衆生は悉く闇より闇にさまよふべきなりと。釋尊自ら無上正覺の眼、知見を以て一切衆生の心を闇黒を脱して絶対の光明に歸せしめ給ふ故に導師とす。

佛陀は自覺覺他覺行究滿、自ら一切種智の眼を開いて諦に開悟、佛知見を開きて了々として一切の眞理を照し、

佛陀始め自ら生死の眞理を見ることが能はず生死出離の間に心を煩して遂に求道修道の結果廓然として大悟して無上智を得て自覺圓滿し、衆生を自覺し給ふ如くに教へて覺らしめ給ふ。

佛陀自覺の求道

佛陀は本覺の都より我等衆生を眞理の光明に導かん爲に出世し給へり。然れども矢張り人類に應じて凡位太子の當時に人生自覺を求むる爲めに非常に煩悶をされた。

(そは已に述べた。嚮には人生の拔苦與樂の感情の方面より佛陀の求道の動機を述べた。今は知力的に人生自覺の方より更に佛陀の佛眼を開き給ひし順序を説かんとす。) 太子宮居に在していかせば人生自覺の光明を得ん、人生の何れに歸趣すべきが眞理なるか、未だ人生の光明を得ざれば今効々冥々、如何にして生死解脱の道や、謂所る生を明らめ死を明むる處に永遠涅槃の靈界が顯現すべき。また無上正覺の目が出でざれば神は永夜に迷ふ行路である。此人生自覺の光を發見せざる自己は王位も何かせん榮華の夢を食つて生を闇黒の裡に葬り去ることは聖たる太子の實に忍びざる處、竟に王宮を忍び出でて山に入つて道を學び給ふた。

跋伽仙の苦行林に在す時に二人の王使は太子の爲に父王の命を奏白した。太子曰く父王の恩愛我顧みざるに非ず。唯生老病死の苦を忍るる故なり。若し生死の眞理に明かに覺了するならば何を夫れ父王に背きて家を出づべき。一旦父王の意に背くは將來永く父王共に永遠の光明を發見せん爲なり。若し我宮に居らば衆生の爲に誰か生死決正の光明を發見すべきぞ。昔の諸王入山學道中途にして廢し還つて欲樂を受く今其の諸王の神識何の處に在る。悉く闇黒裡に陥つてあり。我若し宮に還らば、永く無明永夜開くに由なしと告げ給へば、王使改めて白さく、太子の御志甚だ潔し。然れども先哲の説を聞くに未來は定めて果報ありと云ひ或は亦無しと説く。先聖向未だ決定して有無を知らず、太子何ぞ現在の樂を捨て未來不定の果報を求め給ふや生死の果報いまだ決定せず争で解脱の果を求給はむ。願はくば疾く宮に還り給へと奏し上れば、太子の曰く、實に然り彼二仙も未來の果報を説くこと一は有と云ひ一は無と説く。皆疑惑心にて決定の説にあらず。故に我は彼等が教に隨はざるなり。未來の有無不了を以て我を詰るべからず、我は當來の樂果を覺めんが爲に此に來るに非

す。今現前に生老病死の苦を脱するを得ず、我は之を解脱するの知見を求むるなり。必ず當に道成就の曉は父王及び一切を度すべしと。是太子が生死自覺の要求なり。阿羅漢に就いて生死を解脱すべき法要を問ひ給ふに、仙云く、衆生の始は冥初より我慢起り慢より、痴心を生じ、痴より染愛を生じ、愛より五微塵氣を生じ、塵氣より五大を生じ、五大より貪瞋煩惱を生じて生死に流轉せしむ。故に人生死を脱離せんと欲せば家を捨て欲を棄て戒を持し禪定を修すべし。禪定に次第あり初禪定に入て喜心を得、第二禪定に入て樂根を得、第三禪定に入て捨根を得、第四禪定に入て無想處に達す。世の梵土は之を以て涅槃とす。實は是未だ眞の解脱に非ず。我が所謂の解脱は是より色相を離れて空處に入り、有想を離れて識處に入り、一識を觀して無所有處に入り、一切の相を脱離して非想非々想に入る。之を究竟解脱と名づく。是眞の彼岸なり。太子若し四苦を脱せんと欲せば當に此の如く行すべし。仙の説を聞き給ひて太子問給はく、謂ゆる非想非々想處に我ありとせんか我なしとせんか、若し我なしとせば非想非々想と云ふ可からず、若し我ありとせば我は知ありとせんか知なしとせんか、若知なくば木石に同じ、若し知あらば攀緣あり、染著亦生すべし。是究竟解脱と云ふべけんやと。仙遂に答ふること能はず。太子即ち阿羅漢の許を辭してウドラ仙の處に訪ねて道を問ふも、彼は稍微細の境を觀する如きも、彼も亦我ありと計し、想と非想とを離ると説くに止まり、アララ仙と大差なし。是に於て太子自ら思惟す。無上菩提を證し一切種智を得んことは他に依て求むべきに非ず、唯自ら修して自ら證得するに如かじとて去り給ふ。

釋尊の自覺

佛陀當に正覺を成するに先だち、魔軍來りて菩薩を擾亂す。時に空中に多(肩)神有り讚して曰く世間の衆生愚痴に惑へり智慧無くして邪見に著す。菩薩今法眼を開き正道を得て衆生を永遠の光明に導かんとす。亦衆生智慧光なく、大闇黒の中に墮らて茫然として何れに進趣すべきを知らず、菩薩智慧の燈を照して其れをして正道を示し

給ふ。一切衆生の眞導師なり。魔衆生等妨害爲す勿れ。

菩薩は摩訶茶國菩提道場に詣き畢波羅樹の下なる金剛座上に柔軟草を敷きて結跏趺座し給ひ我一切種智を得ずんば、此座を起たじと誓ひ給へり。時に心意清淨湛然不動天に雲霧無く風靜に空清く星月皎潔たる夜に於て菩薩妙覺分法の中絶えず加行を修し給ひ、初夜分に神境智を得て三界十方無量世界を照し、第二更に神通眼を開き、三世の實相を觀すること掌中を見るが如し、第三更に三界の因果を洞視し給ひ、第四更明星出づる時に正しく朗然として無明を除き無上正眞の道を得、即ち一切種智を得給へり。十力四無畏十八不共法悉く證し給へば三界は是我有なり其中の衆生は皆我子なりと覺り、此に於て大智慧眼を開き三界の大導師と成り給へり。

### 正覺と涅槃

大乘佛敎の菩薩が無上道心を發して諸の波羅密を行じて究竟して得る處を無上正覺とす。即ち衆生が無明及び諸の煩惱を轉じて無上の正覺を生ず。是一切種智を以て一切眞理を證して遺すこと無く道德上圓滿に完成して眞の人格の極致に達す。是眞善微妙の極究なり。是菩薩因圓果滿の正覺なり。大涅槃とは菩薩が無量生死の苦を解脱して永恒の生命常住の平和を涅槃と云ふ。是佛果の得たまふ依果なり。

佛陀は大哲人にして大宗敎家なり。大哲人（聖道家）として無究極即ち無上正覺を得て一切の種智を以て、一切の眞理として照さざる無く、また道德上圓滿に靈格の完成したる處を無上正覺位とす。若し之を宗教的に云はば無上正覺とは無明の眠覺めて無量光の日輪圓かに照して靈界が顯現し來ること、例へば闇夜には山河土地等萬物悉く現れざるも日東天に昇る時萬物炳現する如く、心靈界の金鳥無量光顯るる時佛界の無盡の靈徳悉く顯現す。正覺を成すと云はば主體即ち自己の佛眼の開きたる方面、功を自己の力とす。無量光に攝取せらるると云はば夜明けして萬物の現はるるは太陽の光力に依るとす。何れにしても同じ。眼醒めて曉明けて心光顯赫たる世界に入る状態なれども哲學は功を自己の力とし宗敎は光明の徳を客體に歸す。故に正覺を

成すと云ふも無量光に攝せられしと云ふも同じ心理狀態を主體の方が客體の方からとを何れかに本を立つる處にあり。

### 涅槃と無量壽國

佛敎の終局は人生の生死の苦を脱して涅槃常住の樂果を期す。是聖道家にて生死の眞源を明に悟りて涅槃を得。涅槃は生死の反對なる不生不滅ともまた大滅度とも云ふ。涅槃に四あり。

一、自性清淨涅槃。本來人人の本源自性は絶對なる宇宙根柢の同一體にして清淨本然の自性にして生ぜず滅ぜず永恒常樂の體なり。

二、有餘涅槃。有餘とは此有餘依の肉體も有て居り乍ら無漏の涅槃の結果として、自性清淨涅槃を證得して神が永恒常然の涅槃に安住すること、然れども肉體は因果の約束を受けて居る。

三、無餘涅槃。此肉體の報命盡きてからは今迄神識が理想の清淨常樂に安住して居たのが肉體の命盡てよりは理想界が現實と成つて全く清淨涅槃に歸入したる處。

四、無住處涅槃。諸佛は生死に任せず涅槃に住せず。常に常樂我淨の涅槃界に安住し乍ら、一方には衆生濟度の爲に生死界に現じて度生の功用を爲すこと、釋迦牟尼佛の如し。涅槃とは佛敎の終局の歸する處。基督の天國また佛敎に蓮華藏世界常寂光土自性法界宮極樂淨土等種々の應しき名を以て表明せられてを。また無量壽國と云ふ。

極樂とは涅槃は常住安樂自在清淨の四徳莊嚴の故に極樂といふ。無量壽國とは生死界の如く壽命有限有處に非。常恒永遠の常住の生命の故に無量壽國と云ふ。佛果の涅槃を證得と云はば聖道に即ち哲人の歸する處。無量壽國に生ずと云はば宗敎的である。

### 自覺の要ある衆生

佛陀は何故に世の眼となりて衆生を引導し給ふ。若し人の身體中に眼目無ければ世界も悉く闇黒なり。現世界は廣大に人類は無數なり。若し佛陀智慧眼出世し給はずば人の身體に眼無きが如く世界は闇黒なり。人は何故に生れ來りしやまた人生の歸趣する處自ら覺ること能はず。世間に善惡の因果ありて其業に因て六道苦樂の果報あることを知らず。また進んで出世間の因果として無漏聖道の因に依て無爲泥洹の果あるを信せず、冥より冥に入る衆生實に感むべし。經に、世の人善を作して善を得、道を爲して道を得ることを信せず、人死して更に生じ惠施して福を得ることを信せず、善惡の事都べて之を信せず、之を然らずと謂ひて終に是とすること無し。又經に、道を行じて度世を得べきことを、死後に神明更に生ずることを信せず、乃ち生死善惡の趣自然に是あることを開示すれども嘗て之を信せず。苦心に與に語れるも其人に益なし心中閉塞して意開解せず。大命終らんとするに悔懼交々至る。豫め善を修めず窮に臨んで悔ゆとも及ばんや。

經に、苦心に示し給へる如く人類實に愚昧なり。

人は宗教の光を要する者なり。喩へばいかに健全なる頭腦を有てる人にも教育等の知能を開發すべき機會を得ざれば知識の働きの作すこと能はざる如く、人は宗教的に靈性を具有す、然れども之を開發する機會を與へざれば靈的自覺は得ざるなり。

見惑の先天と後天

人生の終局目的はいかに自ら未だ終局の歸趣する處を自覺せずして人生の行路を取るものは盲目的生活なり。一日十里の行路を取る未だ何の目的定まらずと汗を絞つて行く者有らば誰か其愚を憐まざらん。然るに世人に概して人生の終極を定めて其目的に向つて進趣する者は稀なり。若し佛陀世に出まざらずば見濁の世に在て多くは唯高等動物の生活に甘んじて終るもの皆々然らん。

佛教は佛陀が世間の眼となつて自ら正覺を成じ、心靈の日光赫々照す無量光明界

に在まして一切衆生を引導するに衆生の正知見を開きて自ら得給ふ處の無上正覺無量光の中に入らしめん爲に世に出給へり。然れども之を信せずして還つて無明の永夜人生冥々として塵路に墜るるものは何故となれば、正知見の光を得られぬ人の惑を見惑と云。此に二種あり。一は無明、二に見惑。一に無明とは一切衆生共に先天的生れ乍ら冥昧にして自ら生死の淵源を覺ること能はざるは先に述べし如く世間の知識にても知能は具有すれども教育等の機を以て之を開發せざれば知識を得ざる如く、佛性は具有すれども之を開發せざれば人生の自心を覺知すること能はぬ。是生來の根本無明也。二に見惑とは後天的に世間の種々の學說臆測の説に惑はされて正知見を開くこと出來ぬもの、之に十見あり。五利使五鈍使と云ふ。中に五利使が大に世の有識者の却て惑ひ易き不知知である。五利使とは一身見、二邊見、三邪見、四取見、五戒禁取見。一身見、今は唯物主義として現今人生觀若くは心靈觀未來觀等に對して大いに惑ひ易き唯物主義の説である。其代表たるヘツケルの如き、人の身體を組織する腦髓神經また凡ての生理機能の全部は悉皆無數の細胞を以て組織せられて居る。すべての細胞は元形質と核との合したるものにて一々の細胞は皆生命である。極少の生物アミンバの如き單細胞とも云べき物も生きて居る。其單細胞から分殖し竟に無數の細胞の聚合物が今の人間の身體である。例へば有ゆる細胞悉く單獨生活して其聚合同體が人の身體である。心臟の細胞の如きは身體から離れても數時間生きて居るが故に一々細胞の生命の聚合して全體の獨別の生命と成ると云つて居る。ヘツケルの如きは靈魂と云ふも歸する處細胞の外にない、例へば子の生るるも父母の生殖細胞兩方から合して兩方の精子卵子の細胞生命が人の本にて靈魂と云ふも細胞であると。尤も佛教にても人と云ひ我と云ひ生命と云ひ、物質と心質との聚合物に過ぎず、此聚合同體の外に人と云ひ我と云ひ生命と云ふべきもの有るに非ずとは、小乘佛教また金剛經等に盛に主張する處である。

次に物質生命の電子生命説等である。

唯物論者は靈魂と云ひ生命と云ひ其歸する處は物質の電子と力とに過ぎぬと主張す。物質も昔は原子を原位としたれども現在では原子は數多の電子の聚合であると云ふ。電子の聚合が原子と曰はる。人の精神なるものが電子から如何にして精神の現象と成つたり全體物質から精神も作用を成すか。然らば其物質と曰ふ物の定義何に歸するかと云はば、物質と云ふ物は主觀客觀の兩質を具有して居る。自己に活動と意識作用を起すべき性質を具有せる電子であると云はば、然らば物質とも云得るし又心質とも云得る體質に歸す。

人の精神は平素多く力を用ふる方に發達す。故に物質の方のみ力を用うる人はすべて物質に觀じられ精神に力を用うればすべて主觀的に解す。實は同一體を兩面から觀たのである。謂ゆる人間は外面よりは全體物質のみに見えて内觀すれば全體精神のみに觀じらるると云ふ如き一體の兩面觀に過ぎぬ。

世人内觀の素養は乏しく外部より見る習慣性からして凡てを唯物と見るに至る。内觀に益々深く入て人の精神の奥には實に至善微妙の靈界の存することを經驗せざる輩は實は高等に精神の進化したる甲斐なき徒である。

精神作用の二、全體精神の本質とす。

人間精神若くは生命を説明するに消極と積極との二面觀あり。世間も佛教も同じく世間にも唯物論者の如きは人間の精神を研究するも物質の原子其本の電子と云ふやうに本に本にと遡り、人間に達した大成した方面より見ずして原始の精神や卵子の本の方より成べく精神的に高等なる作用のせぬ方面にて精神の本質を説明せんとす。分子若くは原子の聚合せぬ原子の方より見て人間の精神は聚合の團體に過ぎずと心得る限り精神また生命の價値を廉價にせんとす。佛教でも消極主義金剛經等は人は諸の聚合物なので各元素に還歸すれば人と云ふ生命も我も本来無いと云つて居る。

積極主義は精神を研究するに大乘佛教の如く精神の本質を觀せんには天性素朴の精神は未だ眞に精神の眞實發揮せざるので眞の精神の實質は眞如の光明自性清淨虛微

靈妙なる處に精神の實質 顯現したのである。集起心、緣慮心また肉團心などは精神の實質萌發せぬ状態である。是の如く眞如光明顯たる處に精神の本位と爲る。消極主義は精神の本質は物質の單位單細胞が生物の當體の精神の本位である。一方は精神の本位を非常に高價に價を拂ひ一は甚しく精神の本質を低直に購つて居る。

人生歸趣の標準

世眼の導師は三界我有 一切衆生の父、自然界の日光なれば其の道ふ處 即ち光明にて、道ふままに進めば我は知見を開きて日中の道路とならん。然れども衆生の爲に人生の歸趣を明し給ふに二の方面より眞理の知見を興へたまへり。一に宇宙の大法。二に個性の伏能開發。

一切の生物此世界に生存して生の從來する處死の趣向する處宇宙の法則によらぬはなし。今日の科學と云ふも自然が萬物に規定する處 自然は如何にして天體を經營するや生物を活かひるやの理を研究して天體學または理學等と名くる如く、人類生死の理また永遠の歸趣の理に於て、宇宙の大法に則らずして得べき理なし。宇宙は實に絶大なる設備を以て宇宙を構成し一切の生物を生起せしむ。現に此生物に最高等に進みたる人類の如き精神生活に入らしむ斯生物に對して人類精神に希望する如き理想の天國に歸趣すべき法則ありや、終局目的の宇宙の大法に存在する哉。釋尊は宇宙の大法を諳かに知見したまひて衆生を導きたまふ、然るに世の學者中に宇宙には終局目的が存すか否かに就ては古來哲學者の大いに論ずる處、唯心論者は宇宙は一大心靈の實體なれば衆生を此世に生ぜしむるは終局目的ありて永遠の光明、神の國に歸趣せしむ。故に終局目的に隨順する者は永く涅槃常樂に歸入して常住の幸福を受け、之に隨順せざれば永く闇黒に沈淪すと。唯物論者は宇宙を構造する本質は唯物質にて物質の勢力が自然法に依りて萬物の行はるるは器械的運動に過ぎず自然に因果律が存在するも終局目的の法則の存在を證明する事能はずと。兩者の宇宙の法則に對する見解大いに其趣を異にす。

佛陀は宇宙の大法を覺りたまひて衆生に教へたまふ。法華經に、佛と佛のみ諸法の實相を知りたまふ。諸法の實相とは如來は宇宙萬有の實相を覺り給ふ。

實相論者は是の如くに説く。萬有の實相を覺すれば即ち佛なり。實相を覺するを佛法と云ふ。實相を覺らざる者は迷つて六道生死の苦を受く。若し實相を悟れば本覺に歸趣して正覺を成すと。

信論に曰く、心真如とは一法界大總相法門の體なり。謂ゆる心性は不生不滅なり。

一切の諸法は唯念に依て差別あるなり。若し心念を離るれば即ち一切境界の相なし。宇宙の大法の本體が即ち真如即ち一切法の本性である。其真如が隨縁して因縁相縁つて現れたる萬有衆生である。衆生と云ふも因縁に離れては無い。夫を實に我あり人あり壽命ありと執着するは迷なり。此迷に依りて衆生種々の業を作り六道生死の身を受く。若し我は因縁より生じたので因縁の本性は平等真如なりと其本性に還れば自性清淨の涅槃であると。

解深密教に佛曰く、一切の法の自性は本來寂靜にして自性涅槃なり。涅槃の故に自性は認むべからず。故に自性なしと説きぬ。諸法は衆生が相ありと執着するが故に有り。然れ共是れ假の名にして實無きなり。次に諸法は因縁によりて成りたる假の有りして實は無なり。次に諸法の本性は見る可からず聞可からず生もなく滅もなきなり。

宇宙大法が即ち一切の法性である。佛陀世に出給ふも出世せざるも常住本然の理法である。經に一切の法性一切の法相は有佛無佛常住にして異らずと。

佛陀は宇宙大法の本性を覺り給ふて衆生を導くに之に隨ふべく教へ給ふ。法華經に佛の言く。

諸佛の智慧は甚深無量なり。其智慧の門は解し難し入り難し、一切聲聞緣覺の知り能はざる處なり。我曾て百十萬億無数の諸佛を供養し諸佛無量の道法を行じ盡して乃至未だ曾てなき甚深の法を成就して宜しきに隨つて法を説く。舍利弗よ吾成佛して已

來種々の因縁と譬喩とを以て廣く教を説いて衆生を導き諸の執着を離れしむ。之れ如來は方便智見波羅密を具足し廣大深遠無量無礙無所長禪定解脫三昧を以て深く法の實際を觀じ一切未曾有の法を成就し給へり。舍利弗よ如來は能く種々に分別し法を説くに言辭柔軟にして衆生を悦ばしむ。舍利弗よ佛は是の如く無量無邊未曾有の法を悉く成就したり。然れども止みなん、舍利弗よ、我れ復之を説く可からず。其故は佛の成就したる法は第一希有難解にして唯佛と佛とのみ其實相を究盡め給へばなり。謂ゆる諸法の實相とは如是相如是性如是體如是力如是作如是因如是縁如是果如是報如是本末究竟等なり。

佛は諸法の實相を證り給ふ諸法の實相は即ち十如の本性これ即ち真如の自性なり。宇宙萬有の本性はなり。之を覺らざる故に衆生は唯因縁より生じたる世界の現象五塵々境に迷ひ假名の名譽權利財産等に執着して惑より種々の善惡の業を作り業に依りて六道生死の苦を享く。

佛陀は一切衆生の自性根底なる自己心中の諸法實相を覺らしめん爲に世に出現し給へり。

宇宙大法の勢力、一切衆生を本覺の深源に到達すべき大道が宇宙に存在す。之を阿耨多羅三藐三菩提と云ふ譯すれば、無上道、是大道の勢力が萬有に内存し一切諸佛此大道に入つて大道に隨順して成佛し給へり。此大道は自然界に全體の軌道が在りてあらゆる星辰が其軌道を逸せずして幾千萬年に變らず循環する如く一切衆生の精神を攝めて常恒に運行する靈的大道を阿耨菩提と名づく。尙例せば天命之を性と云ふ性に率ふ之を道と云ふ。天命の性が行ふべき道である。私を離れたる天の道である。基督が謂ゆる我は我道を行くに非ずして神の道を行くなり。我道は即ち私の道、私の道は關より關への地獄に行く道である。佛教にて有漏の迷の業道に六道あり。即ち三善道と三惡道である。邪見を以て逆惡の業道は即ち地獄の道である。仁義五常の常倫を行ふは人道である。無漏の聖悟の三道あり。聲聞菩提、緣覺菩提、無上菩提、菩提は道で

ある。

### 無漏の正道

道を世間の國道また縣道等の如く、國中より帝都に通ずるを國道と云ひ其縣下より縣廳に達するを縣道と云ふ如く、聲聞涅槃、即阿羅漢果の涅槃を得んには聲聞の道諦三十七道品を修して究竟地に至る。一切諸佛と等しき無上正覺菩提に到らんには無上菩提心四弘誓願等の大道心を發す。故に無上の佛陀に至らんには自己の因果を捨て我を捨て如來の大道に参加す之を發菩提心とす。

菩提とは是一切諸佛の在ます處、諸佛は有ゆる五十一地の煩惱を除き元品無明をも破りて妙覺の位に入る。永く無明の父母に別れ究竟して涅槃山頂に登り、諸法不生なれば、般若不生、之を大涅槃と名づく。絕大法性の大虛を座と爲し、清淨法身を成じて常寂光土に居るとは是台家。無上覺を成じたる相を明す。諸佛無上の覺位に到達する道程を無上道と名づく。道を如何にして行くとすれば台家には實は法性眞如の月は自然にして然り。煩惱も染むる事能はず苦も惱ますこと能はず道も通すること能はず滅も淨むること能はず雲の月を籠むとも妨害すること能はざる如し。煩惱さへ却くれば即ち法性の月は見ゆると。道とは本覺の月を顯はす雲を除く道である。曰く法性は月の如く苦集は雲の如く道は却除の如く滅は却已の如し。

佛陀は宇宙の大法即ち眞如法性の眞理を悟りなされて之に隨順すれば成佛、之に逆戻すれば生死に流轉すと教へ、法性の理を覺るべき法が佛法である。佛家に發すべき菩提心は宇宙大道即ち自性清淨の常寂光土清淨法身に到達すべきを無上菩提心と名づけ、是宇宙大法と。大道に順つて終局目的に達すべきを教へたまへり。

### 個性の状態の開發

我等は佛陀の教を受けて人生の歸趣として成佛すべき性能ありや。人生の歸趣を講ずるに一方に宇宙の大法に隨順して終局に到達する理法が佛法なりとは已に聞きぬ。人類の本具の性能に伏在する性を遂性的に開發してとは實に然り。縱令宇宙の大法

及勢力はあるも我等が自性に本來佛に成り得べき伏能、本來自己に伏在せる性能を完全に發揮する已外に望みを起すべきにあらず。例せば植物の種子若くは高等なる松柏の如きまた低級なる或植物の如き各自の種子に具有する生産起元の作用を充分に培養して充分に成長せしむべし。然れども大豆の種子より生産する植物がいかに培養を施すも大杉と爲すことは望むべからざる如くに、人類の本具與底に伏在する性能を完全に發揮せば可ならん。夫已上に希望を起すも將た何の效能か有らん。就ては人類性能は全く成佛すべき伏能存在すべきものならんか。

人類の性に就ては唐の宗密禪師能く研究の結果を原人論と云ふ小冊子に講述せられたり。其大意に曰く、儒道二教の如きは人の本性を説明するに唯元氣の方より人の原を説明せり。抑々人の源本は近くは乃父乃祖遠くは陰陽一大元氣が自然の道法が根本である。云ひ換ふれば我此身は本近くは親や祖先から受けたので遠くは天地の一大氣より稟たる物で、本大元氣から稟て畢竟する處は本の一大元氣に還るに過ぎず。自然科学者の見解も多くは此類よりならん。

佛教は人間の本源を心靈の方より説いて居る。同じ佛教にも其の説く處淺深あり。淺きは曰く人の本源は善惡の業(カルマ)が本である。業の善惡に依て苦樂の果を招き現在の自己は過去の業より造つたので業を根本とす。次に進んで全體業と云ふは力用である。力には體が無かる可からず、宇宙に自然法爾の理に阿頼耶識なるものありすれば藏識、喻へば藏に種子物を藏むる如く根境識の心識に主觀(心、客觀(物))とも現すべき性を有て居る。此識が本として自己の心とも外の萬物にも現じたので、此識に有漏の種が薫すれば六道の衆生と國土と成り、無漏の眞如が薫すれば羅漢や佛と成る依て人の根本は識である。此説を權大乘と云ひ、尙進んで人の本性は眞如佛性、即ち如來藏性で此佛性開顯すれば凡夫が即ち佛と成る。人々本來佛と等しき靈性具有して自ら開顯する能はず。

佛陀が菩提樹下にて正覺を成じ一切衆生を觀見して喟然として嘆じて曰く奇哉、一



切衆生具以佛性開之……

經に我一切衆生を觀るに衆生皆貪欲瞋恚癡等の煩惱の中に佛の知見、佛の眼と佛の身とを具へて儼然として動かさず。善男子よ一切衆生は煩惱の中に在りても常に汚れる如來藏あり。徳相具備して我と異なることなし。譬へば眞金の不淨の中に墮ちて隠没して現れず年を経るも眞金の質は壞れず而も知るものなし。唯天眼ある者は能く眞金ある事を知るが如し。

首楞嚴經に衆生元より佛性あり他より得べきにあらず。譬へば人ありて自らの衣の中に如意珠を持ち乍ら覺知らざる如し。又倉に寶を藏し乍ら之を知らずして馳走して食を求むるが如し。

權大乘には法爾として五性各別に有情無性の如きは善根を積みて人天の果報は受得らるるも成佛は出來ぬと云ふ主義である。實大乘にては一切衆生悉有佛性なれば何人も成佛すべき伏能無き者はなし。同じ佛教にて期く三義の別るる所以は一切衆生の性に遠近の二因あり、遠因には一切衆生同一の根底なれば悉有佛性を説くべきも、然れども近因即ち( )因若くは遺傳素質に至つては性質同じからず宗教播付に適不あり、土地の硬地と沃地とのある如し。其近因素質の性質より五性各別に別る。

今は人々本具の性能を可遂的に發揮を要する伏能開發して宇宙の大法と終局目的とは自然に合一すべきなり。上來は大乘佛教の哲學的に世眼が世の導師と成りて佛法を以て衆生の佛性が發きて究極なる正覺涅槃を得べきを説明せり尙進んで實地宗教的に一切衆生を導き給はんとして、大悲の法門を述べん。

佛智の大宗教家とし彌陀の化權としての釋尊は一切衆生の大慈父として彌陀本願光明の眞理を示して永遠に活ける彌陀の天心光に我等を攝取せしめ、我等が信心の靈眼を開き現在を通じて永遠にまで彌陀の子とし光明、明中の人と爲し、現在には理想的に彌陀の智慧と慈悲の光明の中に價値ある如理の精神生活をなさしめ命終らば現實の如來光明土に諸佛と等しき正覺を取らしめ給ふ道を以て我等を導き給ふ。

經に如來無盡の大悲を以て三界を矜哀し所以に世に出興し光く道教を闡き群萌を拯はんと欲して惠むに眞實の利を以てす。乃至一切諸天人民を開化し給ふ。

世眼は衆生の知見を開示し  
世眼としての導師が世に出來して佛眼佛智見を開きて一切衆生を以て一切の眞理を覺り之を自覺と云ふ。尙進んで一切衆生を覺らしむ之を覺他とす。

法華經に諸佛如來は一大事因縁を以ての故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見を開かしめん爲の故に世に出現したまふ。佛知見を開示悟入、佛の正道に悟入せしめん爲に世に出現し給ふ。

自己の佛性もまた宇宙法界も悉く眞如實相ならざるはなし。然れども佛性の心が開かざれば知見すること能はず。世眼が衆生の知見を開き如來の甚深秘密藏の奥にある重々無盡の寶藏を悉く興へ給ふ。衆生は秘密の寶藏を遺すことなく知見し悟入して初めて如來は我にして我は如來であることを自覺することを得。

佛知見を開示悟入の四字を天臺にては圓教の住行向地の四十位に配す。

世眼一大事因縁

一大事とは謂く一が即ち實相、其性廣博故に大と爲す。如來出世の儀式を事とす衆生が此實相(一心三千)を具して能く佛を感すべき機の成りしを因と爲す。如來は自ら此實相を證して能く度生に應ずるを緣とす。如來が世に出現する皆一切衆生本有の實相を開示し其れをして成く佛の知見に悟入することを得せしめん爲に世に出でたまふ。此を措ては如來出世の本懷は有らざるなり。衆生の實相即佛知見を開示悟入の四字を住、行、向、地の四十位に配す。初發心地、便正覺を成す。所有の慧身他に由つて悟らず、清淨法身湛然として一切に應ずと。此圓教の四十二位を明すと。初發心は初位八相成佛して分に證果にて慧身は般若の徳、了因佛性開發の妙法身は即ち法身の徳、正因の性開發す。應一切は即ち解脱の徳、緣因性開發此三身は本有を開發的に他に由つて悟らしむ佛知見開發悟入は十住の分證成佛より究竟成佛に至る迄の

階位。… 喜家に聖道即ち哲學的に自己の本性を開示するを以て成佛の旨とす。若し釋迦が大宗家として衆生の知見を開示悟入する階級的に明せば

宗教的の開示悟入

哲人としての釋尊は法華に示す如く各自の佛性を開示して心の實相に悟入すれば各自各佛なれど、他佛の攝護を仰ぐに由なし。亦自己の靈性を開示せよとお勧めになられ、宗教家としての釋尊は大に異れり。基督が愛神たる父に對する如くに、無量光如來の光明を照して衆生を攝化し給ふ。衆生念佛三昧を以て彌陀の光明を被むれば信心開發して佛知見を開示され秘密藏の中に悟入することを得。宗教的人佛釋尊は即ち教主にして衆生の心身を開發したまふは絶對の靈界に在ますあみだ如來の心光に接觸すべき眞理を教へたまふ。彌陀は常恒に心光普く照して十方衆生を（一）したまふ。衆生一心に念佛三昧に入つて神を凝らして不斷なれば三昧發得して佛知見開發して念佛三昧にて如來の聖境を開示さる。其形式を明さば

一開(感覺的啓示)感覺的とは三昧定中若くは(一)の定中に如來の相好光明また瑠璃寶地宮殿樓閣等の莊嚴或は明相又は花を見或は天樂の音聲を感じまたは妙香異聲を感じ甘露妙味を感じまたは柔軟衣を以て身に覆はる等の色聲香味觸の感覺的に感する類を感覺的啓示とす。

示(寫象的啓示)如來の相好莊嚴等の感覺より進んで如來の智慧慈悲等の内包の聖徳を感ず。觀經に佛身を觀る者は亦佛心を見る。佛心とは大慈悲是なり。無縁の慈を以て諸の衆生を攝す等。また如來の大圓鏡智等の四智乃至すべての内證の徳を示さる。亦説話的に啓示せらる。聖善導の定中に百餘人の佛曰く、樹を伐らんには連に斧を下せ、縁なきには共に語ること無けん。家に還んには苦を辭する莫れ、又禱をして三罪を懺悔せしむべし。方に往生すべし等。觀經に疏を造るに結願して靈驗を請求するに夢定中に種々の靈相を感じ毎夜夢中に常に一の僧あり來りて玄義科文を指授したまふ、是等は説話的の啓示なり。

悟(法身理想的啓示)如來法身の體に證入す。法身の體に證入とは群疑論に問ふて曰く念佛三昧所見の佛は三身の中には何の身を見るかと爲んや。釋して曰く通じて念佛三昧を論すれば三身俱に念ず、無相の念佛三昧を得んとならば法身の佛を念すべし。有相の念佛三昧を得んとならば報化の身の佛を念すべし。又修觀の者鹿より細に至つて先づ身色の觀を爲し後に法身の觀を作すべし修學の次第なりと。禪の見性は直に自性天真清淨法身を見る之を見性悟道とす。之に準する清淨法身を見るを悟の位とす。

入。已に如來の體中に入り如來藏性を開き如來は我父にして我は如來の子なり父の所有は我所有なり。十方四無畏十八不共等一切の佛法藏に入て自(一)を得即ち無生法忍を得また陀羅尼門を得る等なり。天臺大師は光州大蘇山に於て法華三昧を修し法華經を誦し藥王品中是真精進是名眞法供養如來の句に至つて身心豁然寂定に入り、靈山會上に大衆と共に法華經を聞く會坐儼然として散せざることを徴見すと。其後旋陀羅尼を得て辨才無碍を得たりと。

世眼導師の衆生を導きたまふ本意は、衆生生死の闇黑裡より如來光明に導き、無明煩惱の闇黑より正覺無量光に信入せしめ、生死苦惱の中より涅槃無量壽の生活に歸入せしむるにあり。

昭和五年二月廿五日印刷  
同 廿八日發行  
年七冊制は廢止  
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成  
發行人 山崎 辨 成

東京市小石川區飯町四十五  
印刷人 小林 七 太郎  
東京市小石川一四九五

發行所 東京市小石川區水道橋二ノ四四  
ミオヤのひかり社  
振替東京六八五一番